

日本最初の商社結成

あまか
天翔ける

坂本龍馬 ④

一龍斎貞花

講談師

勝海舟は幕臣ではあるものの時流を把握し「徳川幕府が日本を収めることは最早むつかしい。優秀な人物が揃っている薩摩や長州などの勢力が手をたずさえて国を動かして諸外国と渡り合うことだ」かねてからこんな考えを有していた。

しかし薩摩は禁門の変で長州を叩きのめすなど両藩の仲は悪く、同盟を結ぶなど考えられないことでした。

長州に勝ったとはいえ、薩摩もイギリスとの戦いで大きな打撃をこうむり、藩を立て直そうと考えていたところへ、海舟から坂本龍馬はじめ30名の航海術を身につけた人材を得ることは渡りに船でもあったのです。

龍馬は、薩摩藩家老小松帯刀の紹介で最高権力者島津久光に面会し、同盟の話をするや、大藩の薩摩、長州を傘下に収めようという気もあったのでしよう同盟

を了承。龍馬は長州に落ち延びていた公家の三条実美にも会い同盟の話を。さらに長州の実力者桂小五郎にも面会。龍馬の行動力です。

「雄藩連合の必要性を感じてはいるが、薩摩と長州が手を結ぶことはむつかしい」「桂さん、西郷さんに是非会って下さい」渋る桂を説得し会談を承諾させたものの、西郷がドタキャン。怒り心頭の桂に「急用のため来られなくなったのです。同盟に反対ではありません。如何でしょう。私達が薩摩藩の名義で長州藩のために武器や軍艦を購入しますから」

幕府との戦いに負けた長州は、表立って貿易が出来ず武器の購入に困っていたから願ってもない話です。

さて薩摩名義とはいえ、国交のない長州へ横流しするためには貿易をするための組織が必要。小松に従って長崎へ行き地元の豪商の援助も受け、小高い亀山を選ぶや小松が、借家を借りてくれここに海援隊の前身で日本最初の商社ともいべき亀山社中発足。

日本最初の商社・亀山社中

長崎は外国人の居留地で交易が盛ん。早速イギリス商人グラバーと取引開始。仕事の内容は、海運、貿易、政治活動、人材派遣などの他、軍艦を購入し海軍として育成。当初は20人程。土佐藩の他、賛同した各藩の志士、さらに農民、町人も参加。商才のある近藤長次郎は饅頭屋

の俸から武士に取り立てられている。身分制度の厳しい当時に画期的な集団。制服は全員白の袴、薩摩藩から月1人当り3両2分の給料、社長の龍馬も同じ全員一律。当時の1両は今の3～4万ですから13～14万円。新撰組も同じ給料だが出世すると昇給し、近藤勇や土方歳三らは40～50両というから2百万近い給料。一律の龍馬とはえらい違い。

同盟が結ばれていないから薩摩と長州は直接取引が出来ない。そこで仲介するのが貿易商社亀山社中。中古のゲベル銃3千挺、ピストル4千3百挺他合計1万6千挺の銃、9万2千4百両で購入、約35億円。今も昔も軍備には金がかかる。長州は大喜び。薩摩は米の確保に困っていたので代金の代わりに米を渡す。かくして陰悪だった両藩の関係修復が進んでいきます。

第1回の同盟会議は、お互い^{めんつ}面子にこだわり、ことに薩摩は大藩を鼻にかけて横柄で決裂。龍馬は、桂や西郷を必死で説得。^{ひかず}日数を重ねたが京都の薩摩藩邸にて小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通。長州側は桂小五郎、品川弥次郎、三好軍太郎出席のもと遂に薩長同盟成立。

龍馬の危機

慶応2年1月24日。同盟が成立しホッとした龍馬と三吉慎蔵は寺田屋へ帰り「やっと同盟がなった。これで一安心だ」「うん、今夜はゆっくり飲もう」お龍が「祝

い酒じゃに、どんと飲みなはれ」夜中過ぎまで飲んで寝た。片づけ終って午前2時頃風呂に入ったお龍は、何やら外がざわついて大勢の足音が。外を伺うと人影が寺田屋を取り巻いている。ハッと思うや風呂から飛び出し裸のまま2階へ駆け上り、2人を叩き起し「危い、早よう逃げて」「なにい」逃げる暇もない、龍馬素早く刀を腰に、長州の高杉晋作から香港土産にもらったピストルを持った。数人の捕手が上ってくるや、「御用だ、引っ捕えろ」多勢に無勢、ピストルをズドンと一発、アッと叫んでのっけに倒れる。続いて飛び込む一人にもう一発。更に斬り込んできた奴にまた一発。腕を斬られて手傷を負ったが、すきをうかがって下へ飛び降り、戸をけ破って隣の家へ押入り「危急の場合、お許し下され」と逃げ出しなんとか薩摩屋敷へ逃げ込み危うく難をのがれたのでございます。お龍が甲斐甲斐しく傷の手当てをするのを見て「一緒になれ」と勧められ正式に結婚。半月程で大分よくなり帯刀が、「傷によく効くと評判の塩浸温泉がある。お龍さんも一緒に行くといい」かくして龍馬とお龍は鹿児島へ日本最初の新婚旅行に。

いよいよこれより海援隊結成、船中八策、大政奉還、そして龍馬暗殺の次号最終回にご期待下さい。